

愛を分かって 路上生活者らの自立を支援

NPO 法人 ハンド・イン・ハンド（札幌市）

温かい親子丼、湯気を上げる味噌汁、サラダなどが、円卓の一人ひとりに配られた。

中高年世代に混じって、30代男女の姿もある。こざっぱりした身なり。頭髮もきちんと切りそろえ、ヒゲもあたっている。

「寒くなったね」「おいしいね、この丼物。温かいご飯が何よりのご馳走」。かすかにほほ笑みながら、静かに語り合っている。そばに寄りなれば聴き取れない。

■ 人間の尊厳を取り戻すひととき

やがて、コーヒーが供された。時間がゆっくりと流れていく。束の間とはいえ、この場にやってきた人たちにとって、人間の尊厳を取り戻すひとときなのだろう。

よく見ると、何人かの足元にひと抱えもある大きな鞆などが置かれていた。どうやら、俗にホームレスと呼ばれる路上生活者…（NPO法人）ハンド・イン・ハンド（佐藤至英理事長）が実施する「炊き出し」である。

毎週火曜日午後8時から夕食、日曜日午前10時半から昼食を、事務局を置く札幌市中央区のプロテスタント教会「マナチャペ

ル」2階ホールで提供している。

対象は路上生活者ばかりでない。生活保護を受ける人々、年金生活の高齢者・障がい者などの生活困窮者たちも、受け入れている。毎回、2、30人がやってくる。

提供するメニューは親子丼、韓国式混ぜご飯のビビンバ丼、中華丼、親子丼、回鍋肉、三色丼など。

いずれも温かい食べ物だが、もっとも好まれるのは、新鮮な刺身。「生ものを口にできる機会があまりないのでしょう」と、食事の世話にあたるスタッフはいう。



「炊き出し」の温かい食事を摂りながら、静かに語り合う

ハンド・イン・ハンドは「マナチャペル」の教会員らが「路上生活を余儀なくされている方たちが自立するための支援をさせていただこう」と、2003年にNPO法人の認証を受け、本格的な活動をはじめた。実質的な活動は、その1年前からだった。

■ 団塊の世代が「路上」に投げ出された

当時、全国的に路上生活者が急増していた。全道で142人、その大半の88人が札幌市内（道庁調べ）だった。実数は札幌市内だけでも200人はいたろう、とされる。

平均年齢は57.5歳。バブル経済が弾けたあとも長引く不況風にあおられて、団塊の世代を中心に、まさに路上に投げ出された形だった。

この人たちは日中、地下街やバスセンター、札幌駅など温かい場所で過ごす。夜間は公衆トイレやビルの階段などで寒さをしのぐ。場所を確保できなければ、氷点下での凍死を避けるため、朝まで何時間も何時間も歩き続ける。



熱々熱々の豚汁をどうぞ

ハンド・イン・ハンドは、在札幌米国総領事館と共催のシンポジウム「今、なぜホームレス問題なのか」などで呼びかけた。

「なぜ路上生活をしなければならなかったのか。ある方はリストラされて、ある方は会社の倒産によって、ある方は体を壊し、ある方は人間関係が壊れて…。何とか働き口を見つけようとしても、住所がない、連絡が取れないなどの理由で、面接も満足に受けられない」

「幼い時から家族の愛に恵まれなかった方や、学力、能力重視のこの日本で、心に負いきれない程の傷を持ち、希望を失っている。誰が好き好んで、路上の生活を望むだろうか。その心の内を誰が知ることができるだろうか。明日は自分たちの問題となるかもしれない」

実質10年近くに及ぶ炊き出しの大きな目的は「ホームレスの方たちの自立支援」だ。

衣類や風邪、鎮痛剤などの生活物資を募り、支給をしている。住宅の紹介 生活保護申請の同伴、就労支援（求人開拓の実施）、生活・健康相談など、活動分野は多岐にわたる。

また、札幌市民ホールなどで札幌市が年4回実施する「ホームレス総合相談会」にも参画している。レントゲン、血液・血圧、胸囲など、ひと通り検査して、次回の相談会で検査結果を手渡す健康診断・相談から精神保健・法律・就労・生活福祉など、総合相談会のメニューは多様だ。

会場の片隅では、簡易な散髪コーナーも開設される。こざっぱりして、およそホームレスの固定イメージからほど遠い外見に。

利用者は、生活保護受給者などを含め、数十人に及ぶ。このうち 20 人ほどが、健康・法律・就労・生活福祉などの相談をしている。

ハンド・イン・ハンドは、この相談会の「ホームレス」という言い方をあえて「カムホーム」と言い換えている。「ホームレス」から「カムホーム」へ、との熱い思いを込めて。

衣類の寄付申込み宅を尋ね、持ち運んで来る。足元のおぼつかない高齢者の介添え役を果たしたい。やってくる一人ひとりに、もっともっと丁寧に声をかけてあげたい。

活動の主な担い手は、12 人の正会員を中心に、賛助会員（個人）40 人、賛助会員（1 団体）。もっと支援者、賛助会員を増やしたい。

正会員は入会金として 1 万円、年会費一口 1 万円を負担する。賛助会員は個人の年会費が一口 6 千円、団体の年会費が一口 1 万円。

運営費は年間ざっと百数十万円を要する。会費のほか篤志家からの献金や民間団体などからの補助でまかなっている。郵便振込口座は「02750・9・63099 特定非営利活動法人ハンド・イン・ハンド」。

メンバー間の連絡は、炊き出しの際や日曜の礼拝後など、スタッフで顔を合わせたときに必要に応じてやっている。

最近、ホームレスの姿を、ひと頃ほどは見かけない。国が 2008 年 1 月に実施した「ホームレスの実態に関する全国調査」によると、道内では札幌市の 109 人をはじめ、道内 6 市 2 町で合計 145 人が確認された。

確認の場所は、交通ターミナル、24 時間営業店舗、都市公園、商業ビル内、道路、河川敷などだった。

ハンド・イン・ハンドが本格的に活動を開始した 2003 年頃にくらべ、統計上は人数が減っているかにみえるが、現実はどうようだ。

「俗にネットカフェ難民と呼ばれ、アパート代を払えず追い出された若者たちが一日契約の派遣労働で得たわずかな収入を手に、毎日の仮眠場所にネットカフェを利用する、新たな形のホームレスが増えているのではないか」。スタッフの見方である。

派遣会社との連絡に不可欠な携帯電話だけを頼りに、ロッカーに荷物を預け、低料金で利用できるネットカフェを仮の宿にする若者たち。見えないホームレスの存在である。



冬を目前に、厚手のセーターなど衣類を提供

■ 活動の輪を広げて

こうしたネットカフェ難民をはじめ派遣切り、年金問題、医療問題、貧困問題など、深刻化する事態に「反貧困ネット北海道」（札幌市中央区南 8 条西 2 丁目市民活動スペース アウ・クル 313 号室、電話・FAX 011-533-3778）は関係する組織・団体、研究者、市民が連携し、協力関係を築いている。

具体的な活動は、関係組織・団体間の情報共有・情報交換、情報提供・学習活動・啓発活動（啓発資料の作成・配布）、シンポジウム、支援活動・相談援助の連携、協働、人材・資金・物資等の社会資源の調整・開発の促進、研究および政策提言などだ。

また、炊き出しなどの支援や、相談に応じる民間団体として（NPO法人）自立支援事業所ベトサダ、北海道の労働と福祉を考える会、みならずき会、雇用・くらし・SOSネットワークなどがある。

ハンド・イン・ハンドは、今後の活動展開として、これら諸団体との連携の輪を広め、強化して、困窮者らの自立を助ける活動を進めたい、と考える。

「これまでの生活支援に加えて、生活相談、就労支援をはじめ、小規模作業所の開設など、真の自立に向けた支援をしていきたい。年内（2010年）には、高齢者・障がい者を対象とした小規模デイホームサービスを開始できるよう、準備を進めています。不登校などの子どもたちに対する生活学習支援へと活動を広げて」（スタッフ）。

やるべきことが、たくさんある。一步、一步。

■ 連絡先

〒060-0062 札幌市中央区南 2 条西 8 丁目

「マナチャペル」5F

NPO法人 ハンド・イン・ハンド

TEL：011-272-0603/FAX：011-272-6770

Email：shiei@hokusho-u.ac.jp

URL： <http://www5e.biglobe.ne.jp/~agape/>